

仮面ライダークロース グリス ロードの異世界生活 (不定期更新
です)

仮想現実

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

戦兔がジーニアスファームになってから数日後に買い出しを頼まれた万丈と一海と幻徳。しかし買い出しに行く途中に3人の前にエボルトが現れた。エボルトは3人を異世界へワープさせてしまった！元の世界に戻るには様々な敵を倒すしかない。3人は異世界から元の世界へ帰ることができるとか!?？是非読んでください(^^)

目次

異世界とエボルトの弟	1
アブソーブタワー攻略 (1)	7
アブソーブタワー攻略 (2)	13
新アイテム開発! & タワー攻略 (3)	20
タワー攻略 (4) 休憩しようぜ!	27
タワー攻略 (5) なんであなたが!?!?	36
タワー攻略 (6) 私は間違ってない!!	42
すごいでしょ? 最高でしょ? 天才でしょ?	51
科学が示す未来は希望か絶望か:	59
ライダーたちはなぜ戦うのか	63
親子の絆 Be The One	68

異世界とエボルトの弟

戦兎がジーニアスフォームになって数日後、戦兎は万丈、一海、幻徳を呼んで買い出しを頼んだ

戦兎「取り敢えずこのメモに書いてあるのを買ってきてくれ」

万丈「えー自分で行ってこいよー」

戦兎「プロテイン買ってきていいから」

万丈「わかったすぐ行ってくる」

一海「俺は行かねーぞー」

幻徳「俺もだ」

戦兎「買ってきてくれたら、美空の抱き枕…」

一海「心火を燃やして行ってくる」

戦兎「買ってきてくれたら、オーダーメイドTシャツを作るお金をわたそうかなあ」

幻徳「買い出し程度この俺に任せろ」

戦兎「じゃあ頼んだぞー」

万丈、一海、幻徳は街へ出掛けた

万丈「まずはプロテインだ！」

一海「バーカ、メモのやつ買うのが先だろうが。俺は一刻も早く帰ってみーたんの抱き枕を手に入れるんだよ」

幻徳「早く終わらせるぞー」

3人が街に入ろうとした時目の前にエボルト（完全体）が瞬間移動してきた

エボルト「よお、お前ら」

万丈「エボルト!?!?」

一海「なんの用だ、俺は今忙しんだよ」

幻徳がジャケットの下に着ていたTシャツを見せた

「↑右に同じだ」

一海「左だけだな」

幻徳「…わざとだよ」

エボルト「まあまあそんなこと言わずにちよつと話を聞いてくれよ」

万丈「話ってなんだよ」

エボルト「実はな、異世界にいる俺の弟がこの世界で一番強い奴と会いたいと言ってるんだが、誰か会いに行ってくれねーか？」

一海「一番強いと聞かれたからには俺が会いに行く」

万丈「なに言ってるんだ！俺だろ！」

幻徳「いや、一番は…俺だ」

3人は一番強いのは自分だとケンカを始めた

エボルト「ハア、もう面倒くさいからお前ら全員連れて行く」

万丈・一海・幻徳「「え？」」

エボルトが上空にブラックホールをつくるとその中に3人は吸い込まれた

万丈・一海・幻徳「「うあああああああ!!?」」

万丈、一海、幻徳は目を覚ました

万丈「ここはどこだ？まさか異世界か!?!」

一海「異世界って割にはあんまり変わんねーな」

幻徳「スカイウォールもある」

すると3人の前にエボルト（マスター憑依時）によく似たエボルトの弟、アブソープが現れた

※アブソープは英語で吸収を意味する、ちなみにエボルトは英語で発展、進化を意味する

アブソープ「ようこそ、我が支配下の地球へ」

万丈「エボルト？」

アブソープ「違う違う、俺はエボルトの弟のアブソープだ」

一海「お前がエボルトの弟か」

幻徳「俺を呼び出してなんの用だ」

一海「俺たちな」

アブソープ「実はな、俺はこの地球を支配してから随分経っていて、最初は支配しているだけで楽しかったんだけど、なーんか最近暇になってきてなんか刺激が欲しかったんだよ」

万丈「それで俺たちを呼び出したのか」

その時遠くから誰かが近づいてきた

幻徳「あいつは…葛城 巧か？」

一海「なんだって!?!」

アブソープ「おやおや、また倒されにきたのか?」

葛城「違う、今度こそお前を倒す!!?この世界をお前の支配から救ってみせる!!?」

【ゴリラ】

【ダイヤモンド】

【ベストマッチ!】

【Are You Ready?】

葛城「変身」

【輝きのデストロイヤー ゴリラモンド イエーイ】

葛城「うおおお!」

葛城がアブソープに向かって走ってくる

アブソープ「本当に懲りない奴だなあ」

アブソープはエボルドライバーの色違いの黒い色をしたアブソープドライバーを取り出した

【スパイダー】

【ライダーシステム】

【アブソープション】

【Are You Ready?】

アブソープ「変身」

【スパイダー スパイダー ラストスパイダー フワアツハツハツ
ハッハー!】

アブソープ「アブソープ フェーズ1 完了」

万丈「なんだかわかんねーけど一緒に戦った方がいいな」

一海「なら龍我、これ返す」

一海は万丈にドラゴンスクラッシュゼリーを渡した

万丈「お！ありがとよ」

幻徳「いくぞ」

【ドラゴンゼリー】

【ロボットゼリー】

【クロコダイル】

万丈・一海・幻徳「変身！」

【潰れる 流れる 溢れ出る！ ドラゴン イン クローズチャージ
ブウラア！】

【潰れる 流れる 溢れ出る！ ロボット イン グリス ブウラア
！】

【割れる 食われる 砕け散る！ クロコダイル イン ローグ
オオラア！】

万丈はクローズチャージ、一海はグリス、幻徳はローグに変身した
クローズ「ウオオオラア！」

万丈がアブソープを思いつ切り殴る

アブソープ「フン、こんなもんか」

アブソープは万丈に3連続キックを食らわした

クローズ「グアア！」

グリス「龍我！クソ、いくぞヒゲ！」

ローグ「任せろポテト！」

一海と幻徳はアブソープにツインブレイカーとスチームブレード
で同時攻撃をする

アブソープ「エボルトの世界の最強はこんなもんか？」

グリス「全然効いてねー…」

幻徳はすぐにアブソープへ連続攻撃をする

ローグ「ウオオ！」

アブソープ「弱い」

が、幻徳はすぐにアブソープのカウンターをくらい大きく吹き飛ば
された

ローグ「グハア！」

クローズ「まだまだ！カズミン！」

グリス「おう！」

【スクラップブレイク！】

【スクラップファイニッシュ！】

クローズ・グリス「ウオオオオオ！！？」

万丈と一海はアブソープに同時ライダーキックを放った

アブソープ「ほう、これはなかなかいい攻撃だ、だがまだ俺を倒すには足りないな」

アブソープは万丈と一海のライダーキックを受け止め、そのまま上空へ投げて、

【Ready go！】

【アブソープファイニッシュ！！？ Good bye】

必殺技のキックを放った

クローズ・グリス「グアアア！！？」

万丈と一海は強制変身解除した

ローグ「万丈！ポテト！く、ウオオオ！」

【クラックアップファイニッシュ！】

葛城「ハアアア！」

【Ready go！】

【ボルテックファイニッシュ！】

アブソープ「あまい！！？」

アブソープは葛城に強烈な一撃を与えた

葛城「グハア！」

アブソープ「お前もだ！」

【アブソープファイニッシュ！ Good bye】

ローグ「ウアア！」

葛城と幻徳も強制変身解除した

アブソープ「ハア、がっかりだ、エボルトの世界の最強はこんなもんだし、葛城は今まで通りだし。もう今日はいいや、葛城また遊んでやるよ。その3人もいつでもかかってくるぞ。今度はも

うちよつと刺激強めだな。 Good bye」

アブソープは瞬間移動でどこかへ行ってしまった

万丈「ハアハア、強すぎるな、あれでフェーズ1かよ、下手したらエボルトのフェーズ1より強いかもしれねー」

一海「今のままじゃ勝てねーな」

幻徳「なら奴に勝つためにどうする」

葛城「ならみんな一度僕の家に来てくれ、みんなの話を聞かせてくれ」

次回に続く…

アブソープタワー攻略（1）

万丈、一海、幻徳の3人は葛城に自宅へ招かれた

葛城「さあどうぞ上がって」

万丈・一海・幻徳「「おじやましまーす」」

3人はリビングに通された

葛城「とりあえず、キミたちはどこから来たんだい？」

万丈「俺たちはさつき戦ったアブソープの兄、エボルトってやつがいる世界から来たんだ」

一海「俺たちはそのエボルトに「俺の弟がこの世界で一番強いやつと会いたいって言ってたから、誰か行ってくれないか」って言うから誰が行くか俺たちがケンカしてたら」

幻徳「俺たち3人とも異世界へワープされた」

葛城「なるほど、そうゆうことか」

万丈「なあこの地球はいつからアブソープに支配されてんだ？」

葛城「アブソープがこの世界を支配しにきたのはほんとに突然だったんだ。あれはちょうど3年くらい前かな。」

葛城はアブソープがこの地球を支配しに来た時の話をした

葛城「3年前、この地球に宇宙から小さな光の球が落ちて来たんだ。その光の球の中にいたのがアブソープなんだ」

回想

街の人「なんだあの光、こんな昼間から星が見えるなんて珍しいな」

葛城「なんだあれは」

街の人「おい！あの光落ちてくるぞ！みんな逃げろー!!？」

街の人が一斉に逃げ始める。そして光の球は街の中心部へ落ちた。落ちた瞬間、落下地点から3方向に日本を3つに分けるように巨大な壁が出現し、そしてその落下地点には巨大な塔、アブソープタワーが建った。さらに落下した時に粒子のように小さい光の雨が一瞬降った

葛城「なんだ今の雨、光ってたぞ」

落下した光の球の中から地球外生命体アブソープ（フェーズ1）が

出てきた

アブソープ「フー、着陸成功！つてあれ、なんで俺完全体じゃないんだ？」

街の人「うわあなんか出てきた！」

アブソープ「なんかつて、俺はそんなに汚い見た目か？」

そしてすぐに警察や自衛隊が到着して、アブソープへ攻撃を始めた警察A「打てー！」

警察や自衛隊は機関銃やロケットランチャーなどで攻撃するが、アブソープには効くはずがなく、アブソープは衝撃波を発生させて警察や自衛隊をあつという間に片付けてしまった

アブソープ「まあなかなか綺麗な星だし支配してゆっくり吸収しようかな」

アブソープはそう言うのとアブソープタワーの最上階へワープした

回想終了

葛城「そして僕の父さんはアブソープに科学者として、アブソープを完全体にする為にタワーに捕まっているんだ」

一海「そうゆうことか…」

幻徳「なるほどな」

万丈「なんで親父さんを助けに行かねーんだよ！」

葛城「助けられるなら助けたいさ!!?…でも、僕の手じゃ無理なんだ…」

一海「なら、俺たちもアンタの親父さんを助ける為、アブソープを倒すために戦う」

幻徳がジャケットの下に着ていたTシャツを見せた

「賛成だ」

一海「いつ仕込んだんだよ」

葛城「ありがとう」

万丈「さあて早速行きますか！」

一海「バーカ、今行ったつてまたやられるだけだ。もう少しハザードレベルを上げてから行かないと負けるぞ」

万丈「そ、そうだよな」

幻徳「ハザードレベルを上げると言ってもどうするんだ」

一海「それはやっぱり戦うしかないだろ」

万丈「誰とだよ」

一海「いや、それは…」

葛城「それならちようどいいところがある！」

葛城は3人とアブソープタワーの入り口まで来た

一海「おいまさかアブソープと戦うなんて言わねーよな」

葛城「違うよ、このタワーは全部で50層まであってその50層に行くとはアブソープがいるんだ」

万丈「登ったことあるのか？」

葛城「いや、その看板に書いてある」

一海「ん？これか？」

「このタワーは全部で50層まであるよ♪俺は50層、つまり最上階にいるから支配から解放されたい奴はいつでも挑んで来てね♪アブソープより」

追記 たまにタワーから出るときがあるよ」

一海「マジで書いてある」

葛城「とにかく、このタワーの下の層にいる敵ならハザードレベルを上げることができると思うよ」

幻徳「なら話は早いな」

万丈「おう！早速行くか！」

一海「ああ！」

【ドラゴン イン クローズチャージ ブウラア！】

【ロボット イン グリス ブウラア！】

【クロコダイル イン ローグ オオラア！】

【ゴリラモンド イエイイ】

4人は変身してタワーの中へと入っていった
タワーの中に入ってしばらく進むと、くりつとした目をした沢山の
スライムが出てきた

クローズ「なんだ？倒していいのか？」

葛城「うん、倒さないとボスマで行けないからね」

グリス「ウオオオラア！」

一海がツインブレイカーでスライムを倒した

スライム「ギヤアアア！」

グリス「なんだこのスライム！見た目に反してすごい悲鳴あげるんだな」

ローグ「ハア！（クソ！かわいいから倒しづらい！でも倒す！）」

葛城「オリヤア！」

そしてスライムを全て倒して奥へ進んだ。するとひとつの大きな部屋に着いた

クローズ「なんだこのでっけー扉」

葛城「この扉の奥にこの層のボスがいるんだ。僕は何回か戦っているけど全然勝てないんだ」

グリス「心配するな俺たちがいる」

ローグ「さっさと倒すぞ」

幻徳が扉を開け、全員部屋へ入った

そこには身長5mはあって角を生やし、金棒を持った魔人が立っていた

クローズ・グリス・ローグ「コデカー！？」

グリス「これが第1層のボスかよ！」

ローグ「どうやって倒す？」

クローズ「なんでもいい！いくぞ！」

万丈が魔人へツインブレイカー（アタックモード）で攻撃する

クローズ「ハア！」

魔人「グオオ」

クローズ「よし！結構食らってるぞ！」

グリス「俺らもいくぞ！」

一海と幻徳、万丈と葛城は続けざまに魔人へ攻撃をした

クローズ「ウオラ！」

グリス「オラア！」

ローグ「フン！」

葛城「ハア！」

魔人「ゴアアアア！」

魔人は金棒を振り回して葛城へ叩きつけた

魔人「グオオオオオオ!!?」

葛城「しまった！」

魔人の金棒が葛城に直撃する。が、

クローズ「残念だったな」

万丈がとっさに金棒を壊したため葛城はほとんどダメージを食らわなかった

葛城「助かった」

クローズ「気にすんな」

グリス「一気に決めるぞ！」

【スクラップブレイク！】

【ツインファイニッシュ！】

【ファンキーショット！クロコダイル】

【ボルテックファイニッシュ！イエーイ！】

魔人「ゴアアアアアアア!!?」

万丈はライダーキック、葛城はゴリラアームで殴り、一海と幻徳は射撃で魔人を倒した

クローズ「よっしゃー！倒したぜー！」

グリス「喜ぶのはまだ早いぞ、あとアブソープも入れて49体ボスを倒さなきゃいけないんだ」

ローグ「しかもどんどん強くなってるだろう」

葛城「まあまあ、とにかく今はいけるとこまで行ってみよう」

クローズ「おう！」

一方その頃宇宙にて

アブソープ「やあ兄さん久しぶり！遊びに来てくれたんだね嬉しいよ♪」

エボルト「まあちよつとアイツらの様子を見にな」

アブソープ「あああの兄さんの世界の一番強い人達か。最強のは割には弱いね」

エボルト「なーにすぐに強くなるさ」

アブソープ「そっかそれは楽しみだ」

エボルト「さて、そろそろ戻るか」

アブソープ「もう帰るの？」

エボルト「ああそうだ。まだやることがあるからな。チャオ」

エボルトは元の世界へ戻った

エボルト「アブソープは俺の計画には邪魔だからな、アイツらにアブソープを倒してもらわないと。そうすればアイツらもハザードレベルが上がるし、上がれば俺も倒し甲斐があるからWinWinだな」

第3章に続く…

アブソーブタワー攻略（2）

アブソーブタワー第1層を攻略した4人は第2層、3層、4層と順調に攻略していった

万丈「さあてあつという間に5層だな」

一海「まあここまでそんなに強い敵が出てこなかったからな」

幻徳「なんでもいい、早く行くぞ」

葛城「あのさみんな、こんな時に聞くのはどうかと思うんだけど、みんなの名前を覚えてくれないか？」

万丈「あー確かにまだ言っただけじゃなかったな」

3人は思い出したように顔を見合わせる

万丈「俺は万丈 龍我だ、万丈って呼んでくれ」

一海「俺は猿渡 一海、カズミンって呼んでくれ」

幻徳「俺は氷室 幻徳だ」

葛城「僕は葛城 巧、よろしく」

自己紹介を終えた4人は第5層へと進んだ

5層へ進むと身長2くらいの高さが大量に出てきた

万丈「スライムの次はゴーレムか」

一海「さつさと倒すぞ」

4人は次々とゴーレムを倒していく

そしてボス部屋へたどり着いた

幻徳「よし、いくぞ」

幻徳が扉を開けた

そこには先程よりも大量のゴーレムがいた

一海「またゴーレムかよ」

万丈「さすがに飽きてきたな」

葛城「そんなこと言ってる場合じゃなさそうだよ」

幻徳「見ろ」

幻徳がゴーレムのいる方へ指を向けた

万丈「な、なんだあれ」

一海「マジか」

部屋にいた大量のゴーレムが合体して巨大なゴーレムになった
葛城「恐らくこのゴーレムがボスだね」

万丈「よっしゃいくぜ！」

万丈がゴーレムに向かおうとしたとき、一海が万丈を止めた

一海「待て」

万丈「なんでだよ！」

一海「ここは一気に決めるぞ」

幻徳「確かにその方が手っ取り早い」

万丈「戦わないとハザードレベルが上がらないだろ！」

一海「こんな雑魚とやっても無駄な体力を使うだけだ」

一海の意見に葛城も賛成した

万丈「…まあ確かにそうだな」

幻徳「さっさと片付けるぞ」

【スクラップブレイク！】

【スクラップファイニッシュ！】

【クラックアップファイニッシュ！】

【ボルテックファイニッシュ！イエーイ】

4人は同時にライダーキックを放った、そしてゴーレムはライダーキックを食らい無言で消滅した

万丈「よし倒した！次行こうぜ！」

一海「なあヒゲ」

幻徳「なんだポテト」

万丈「よっしゃ第6層もクリアしてやるぜー！」

一海「龍我のやつなんかタワー攻略を楽しんでないか？」

幻徳「ああ全く緊張感が無い」

4人は第6層、7層、8層、9層を攻略し、第10層まできた

一海「ここが10層か」

葛城「僕もここまで来たのは初めてだよ」

万丈「どんな敵でもぶっ倒してやるぜ！」

4人が10層に到達した

万丈「あれ？敵は？」

一海「いねーな」

葛城「いや必ず居るはずだ」

幻徳「警戒を怠るな」

すると突然大量のスマツシユとガーディアンが出てきた

葛城「な、なんだこの機械みたいな怪物は！」

万丈「これはなs」

一海「スマツシユっていつて、まあ今の葛城なら余裕で倒せる相手だ。」

葛城「じゃあこつちの銃を持った方は？」

万丈「こつちはg」

幻徳「ガーディアンといつてただの雑魚だ」

万丈「喋らせるよ！」

葛城「それが分かれば大丈夫だね。よし倒そう！」

4人はスマツシユとガーディアンの群れにつっこんで行った

万丈、一海、幻徳の3人はスマツシユを簡単に倒せるが、葛城はスマツシユやガーディアンと戦ったことがないので苦戦していた

葛城「ちよつと、強いじゃん！話と違うんだけど！」

万丈「あ？？？こういうのはな、気合い入れて殴ればいいんだよ！！？」

万丈はそう言うパンチ一発でスマツシユを倒した

葛城「なるほど！よし、ハア！！？」

葛城も思いつきりスマツシユを殴った

葛城「おー！倒せた！」

「イエーイー！」

万丈と葛城はハイタッチをした

一海「お前ら緊張感なさすぎだ！まだボスとも戦ってないんだぞ！」

幻徳「それにここはまだ10層だ、50層まで程遠いぞ」

一海「今度またはしゃいだらタワーから追い出すからな！いいな！！？」

「は、はい。すいませんでした…」

葛城と万丈は少し落ち込みながらもスマツシユとガーディアンを

倒して、4人はボス部屋に来た

葛城「さあ、10層のボスだね」

一海「お前ら気合い入れていくぞ！」

万丈「おう！任せとけ！」

ボス部屋に入るとそこにはちよつと大きめの阿修羅の銅像が立っていた

万丈「ん？なんだあれ」

幻徳「阿修羅像？」

一海「でもなんで阿修羅像がこんなところにあるんだ？」

葛城「あれがボスなのか？」

すると突然アブソープが阿修羅像の前にワープして現れた

アブソープ「アブソープタワー10層到達おめでとう！」

葛城「アブソープ！」

アブソープ「よお葛城久しぶりだな。そして仮面ライダー諸君も久しぶりだな」

万丈「なんでもいい！今ここでアイツを倒すぞ！」

一海「おう！」

アブソープ「ちよいちよい待てって！俺はちゃんと50層で待つてるから慌てんな。」

葛城「ならなぜここに来た」

アブソープ「それはな、お前らに10層到達した褒美にタワー攻略をもっとおもしろくしてやろうと思ってな」

アブソープはそう言う手から自分の遺伝子を出し、阿修羅像へ憑依させた

アブソープ「これでコイツは俺の遺伝子が入ってかなり強くなった、じゃあ頑張れよ Good Bye」

葛城「待て！」

アブソープは阿修羅像に遺伝子を憑依させたらすぐにワープしてしまった

すると突然阿修羅像の目が赤く光り動き出した

万丈「うお！動いた」

一海「とにかく今はアイツを倒すぞ」

阿修羅像は6本ある全ての腕に刀を武装した

幻徳「こつちに来る！気をつけろ！」

阿修羅像はものすんごい速さで突進し、すれ違い様に4人を一斉に切った

「グアアア！」

「うあああ！」

さらに阿修羅像はまったく先の読めない変幻自在な動きをしながら次々と4人を斬っていく

万丈「強すぎねーか!?!？」

幻徳「まったく隙がない」

葛城「何より速いから避けられない」

一海「とにかく反撃だ！」

4人はそれぞれ阿修羅像に攻撃を当てようとするが、それを阿修羅像はまるで踊っているかのように避ける。更に避けながらも攻撃をしてくる

4人は一旦阿修羅像との距離を置いた

一海「クソ！当たんねー！」

万丈「しかも避けながら攻撃してくるぞ」

幻徳「どうすればいいんだ」

阿修羅像は幻徳に近づくと、上空へ打上げ空中で連続斬りをし、下へ叩きつけた

幻徳「グアアア！」

一海「ヒゲ！クツソ！」

一海が阿修羅像へ攻撃するが、目にも止まらぬ速さで避けられカウンターを食らいぶっ飛んだ

一海「ウアアア！」

万丈「カズミン！」

葛城「万丈！前！」

万丈「!!？」

阿修羅像が猛ダッシュで万丈に近づき6本の刀で同時に斬った

万丈「グハアアア！」

そして阿修羅像は4人を一箇所に吹っ飛ばしながら集めて、刀にエネルギーをため、回転斬りをしながらものすごい速さで突進してきた
葛城「まずい！避ける！」

葛城が指示をするも、阿修羅像が速すぎて間に合わず、全員食らってしまった

「ウアアアアアア！」

4人はそのままタワーの外へぶっ飛ばされ、地上で強制変身解除した

一海「ハアハア、ク：ソ」

万丈「マジ強えー」

葛城「とにかく一旦家に帰ろう」

4人は立ち上がり葛城の家へと戻った

4人はリビングで作戦会議をしていた

一海「だいたいなんだあの強さ、尋常じゃねーぞ」

幻徳「あの速さと攻撃力、アブソーブと同じくらいだ」

葛城「今のままでは10層より上に行けない」

万丈「じゃあどうすんだよ、上に行けないと俺たちのハザードレベルも上がんねーぞ」

葛城「うん、だから今から新アイテムを作ろうと思う、あと次戦うときは…」

葛城はポケットからハザードトリガーを取り出した

葛城「これを使おうと思うんだ」

一海「それは、」

幻徳「ハザードトリガー」

葛城「これは長く使えば自我を失ってしまうんだ」

万丈「今の葛城はどこまで耐えられるんだ？」

葛城「わからない、でもやるしかないんだ」

一海「わかった、暴走したら俺たちが止めてやる」

幻徳がジャケットの下に着ているTシャツを見せた

(賛成だ)

一海「口で言えよ」

葛城「まあ今日はもう休もう」

万丈「葛城く腹減ったー」

葛城「今ご飯作るから待っててくれ」

次回に続く…

新アイテム開発！&タワー攻略（3）

「食事をした後に葛城が3人を呼んだ」

葛城「みんなちよつと来てくれ」

万丈「どうした？」

葛城「新アイテムを作るためにみんなが持っているボトル、もしくはゼリーを見せてくれるかい？」

3人はそれぞれ持っているボトル全てを葛城に渡した

一海「これで全部だ」

葛城「ドラゴン2種にロボットのボトルとゼリー、あとワニのボトルか、これは？」

万丈「グレートクローズドラゴンだ」

葛城「なるほど」

幻徳「作れそうか？」

葛城「うん、頑張ってみるよ」

葛城は地下室へ行き新アイテムの開発を始めた

一海「その間俺らどうするんだ？」

幻徳「さあな」

万丈「じゃあ3人でハザードレベル上げるか」

一海「どうやってだよ」

万丈「それはやっぱり殴り合いだろ」

幻徳「まあそれしかないな」

一海「よし、なら公園でやるぞ」

万丈「おう！」

3人はハザードレベルを少しでも上げるため公園で特訓を始めた
一方その頃地下室では葛城がどんなアイテムにするか悩んでいた

葛城「やっぱりドラゴンは2つ成分を合わせてアイテムを作ろう。」

まずはこのドラゴンマグマフルボトルを解析しないと」

葛城はドラゴンマグマフルボトルを解析した

葛城「おーこれは凄い、この世界には存在しない成分だな、実に興味深い」

次にグレートドラゴンエボルボトルを解析した

葛城「なんだこれは!!?とんでもないエネルギーが入っている、こんな人から生成でもしないとできないぞ、これを新アイテムにするのは厳しそうだけど頑張るか!」

そして残りのボトルやゼリーを解析し終えたら早速作業に取り掛かった

万丈「あく疲れたー」

一海「これでちよつとは上がったろ」

幻徳「実感がわかないがな」

一海「そんなもん戦ってみればすぐわかるだろ」

葛城「お疲れのようだね、夕飯にしよう」

同時刻アブソープタワー50層にて

アブソープ「うーんいつまでもフェーズ1のままってのも飽きてきたなあ、そろそろフェーズ2になるか」

忍「彼らがタワーを攻略していけば当然強くなってくる、出し惜しみはしないでいいだろう」

アブソープ「そうだな、まあしつかしこの星に来た時にまさかアブソープトリガーが壊れるなんてな、タワーにエネルギー使いすぎたんだな」

忍「キミがこの星に来た時一瞬降った光の雨、あれはキミのアブソープトリガーの破片だったんだね」

アブソープ「ああそうだでもあれから3年経った、破片は地下を通りこのタワーに集まり特定の層を突破すると徐々にトリガーが元に戻るようになってる」

忍「なるほど なら恐らく50層に来る頃には完全体まであと一歩ってところか」

アブソープ「早く完全体になってこの星を吸収したいな、なあ先生」
忍「……」

2日後ついに新アイテムが完成した

葛城「できたー」

!!？」

万丈「おーマジか！」

一海「見せてくれ！」

幻徳「俺にも」

葛城「はいはい　じゃあまず万丈から」

葛城はグレートドラゴンエボルボトルとクローズドラゴン型で、クローズドラゴンの黒い部分がマグマカラーに、オレンジの部分が銀色に、青い部分が水色になった新アイテムを出した

万丈「これクローズドラゴンじゃねーか」

葛城「いや違うよ。これはマグマのドラゴンの成分、そしてドラゴンゼリーの成分をなんとか再現し、融合させて作ったリミットクローズドラゴンだ」

万丈「リミットってなんだ？」

一海「極限って意味だ」

葛城「そう、このリミットクローズドラゴンに金色のドラゴンボトルを差し込んで変身すると金色のドラゴンボトルの力を極限まで引き出すことができるんだ」

万丈「ありがとよ！」

一海「で、俺のは？」

幻徳「俺のも」

葛城「2人はこれだよ」

葛城はボトルを装填するレーンが2つあって横にスクラッシュドライバーのレバーがついた腕に装着するタイプのアイテム、パワーロボトライザーを2人に渡した

葛城「そしてこれがカズミンの新しいボトルだ」

葛城はフルフルラビットタンクボトルのようなボトルを一海に渡した

一海「これは？」

葛城「マキシマムロボットボトルだ、これもロボットボトルとゼリーの成分を再現し、融合したものだ」

一海「なるほど、ありがとな」

幻徳「葛城、俺のは」

葛城「幻さんはこれだよ」

幻徳にはラビタンスパークリング型で正面にはワニがボトルを割っているかのようなデザインがされたボトルを渡した

葛城「これはクラックボトルNEOだ、クロコダイルの成分を最大限に引き出すためのボトルだよ」

幻徳「感謝する」

葛城「そしてこれが僕の新しいアイテム、フルフルゴリラモンドボトルだ、これを使えばハザードトリガーによつて暴走することはないから安心して」

一海「わかった」

葛城「あとみんなから預かっていたボトルとゼリーを返すのと、僕の持っているボトルを受け取ってくれ、緊急回避くらいにはなると思うから」

万丈「よし、タワー攻略に行くぞ！」

4人はアブソープタワーの前まで来た

万丈「よし行くか」

一海「お前この前みたいに余計なこととして足引っ張んじゃねえぞ」

万丈「余計なことってなんだよ？」

一海「なんだ？このエビフライ頭」

万丈「エビフライのどこが悪いんだよ？」

一海「悪くねえけどお前ソースぶっかけるぞ この野郎」

葛城「ほーらケンカしてないで行くよ」

葛城によつて一旦ケンカをやめたが、結局お互い睨み合いながらタワーを登っていく2人を見て幻徳がため息をする

幻徳「ハア、ガキか」

4人が10層まで来た

万丈「ここまで雑魚もボスもいなかったな」

葛城「恐らく一度倒すともう出現しないんだね」

そして10層のボス部屋の前まで来て葛城がある作戦を3人に伝えた

葛城「みんな 聞いてくれ」

一海「なんだ？」

葛城「このボスを倒すには まず相手の動きを封じるしかない、そこで1つ作戦があるんだ」

万丈「作戦？」

葛城「まず 僕がフルフルで奴の攻撃に耐える そして万丈が床にマグマを広げて奴をマグマと一緒に固める マグマは空気に触れると短時間で固まるからね。そして一海と幻さんが奴の横から、万丈は前から、僕が後ろから一気にトドメをさす。これでどうかな？」

一海「けど相手はアブソープの遺伝子を持つてるんだぞ、そう簡単に行くか？」

万丈「でもこれしかないよな」

幻徳「ああそうだな」

葛城「もうこれしかないんだ 頼む」

一海「わかった任せろ」

【クローズマグマ！】

【ロボットゼリー】

【クロコダイル】

【ダイヤ&ダイヤ】

【「変身！」】

【極熱筋肉！クローズマグマ！ アーチャチャチャチャチャチャチャ
チャチャアチャー！】

【ロボット イン グリス ブラアアアア！】

【クロコダイル イン ローグ オラアア！】

【オーバーフロー 輝きのハードガーディアン ダイヤダイヤ ヤ
ベーイ！ カテーイ！】

万丈「いくぞ！」

万丈がボス部屋の扉を開けた するとそこには既に阿修羅像が待ちかまえていた

葛城「よし、作戦開始！」

葛城の合図でそれぞれバラバラに移動する

葛城「うおー！ー！」

葛城は全身にダイヤを纏いガードしながら阿修羅像に突っ込んで行った、そして阿修羅像は狙い通り葛城を集中的に攻撃してきた

葛城「今だ！万丈！」

万丈「おう！」

【Ready go! ボルケニック アタック！】

万丈が床にマグマを広げる

万丈「ハア！」

葛城「一海！幻さん！飛ぶんだ！」

【デイスチャージクラッシュ ヘリコプター】

【チャージクラッシュ フェニックス】

一海と幻徳は葛城から渡されていたボトルを使い上空へ飛んだ

その時阿修羅像は攻撃をやめて上へ跳んだ

葛城「まずい、これじゃマグマに当たらない、万丈！もう少し頑張っ

てくれ！」

万丈「任せろ！ウオオオ！」

万丈がさらにマグマを広げる

阿修羅像が上へ跳んだとき上空を飛んでいた一海と幻徳が阿修羅

像に銃口をむけていた

一海「空中ならどんなに早くても避けられねーだろ」

幻徳「落ちろ」

【ツインフィニッシュ！】

【ファンキーショット クロコダイル】

阿修羅像は避けることができず床に落ちた

葛城「今だ！」

そして阿修羅像が起き上がったところを葛城の指示によって万丈のマグマが阿修羅像を覆い冷えて固まる

阿修羅像が全身が固まり動けないところを4人が一気にトドメをさしにいぐ

葛城「ビルドアップ」

【オーバーフロー 剛腕のワイルドデストロイヤー ゴリラゴリラ

ヤベーイ！ ハンパネーイ！

万丈「トドメだあ！」

【Ready go！ ボルケニックファイニッシュ！】

【スクラップファイニッシュ！】

【クラックアップファイニッシュ！】

【Ready go！ ハザードファイニッシュ！ ゴリラゴリラ
ファイニッシュ！】

4人は四方から阿修羅像にむけてライダーキックを放った

「ハアアアアアアアア！」

そして遂に阿修羅像を撃破した

万丈「いよっしゃー！」

一海「なんとか勝った！」

幻徳「フウ、倒した」

葛城「やったね！このままどんどん行こう！」

4人はすぐに次の層へと進んで行った

その頃50層にて

アブソープ「完全体まであと80%……フフフフ、ハハハハ！」

次回に続く……

タワー攻略（4） 休憩しようぜ！

アブソープタワー10層を攻略した4人は次々と他の層を攻略して行って15層まできた

万丈「なーんかここまでのボスあんまり強くなかったな」

葛城「きつとボスにアブソープの遺伝子が入ってなかったからだ」

一海「なるほど」

万丈「てゆうかそろそろ休憩しないか？腹減ったー」

葛城「そうだね、どこか休憩できそうな場所あるといいけど」

幻徳「ならあそこはどうだ？」

幻徳が指を向けた先にはカフェがあった

一海「いやなぜに？」

葛城「なんでこんなところにカフェ？」

4人は変身解除してカフェの前まできた

そのカフェの看板に店の名前が書いてあった

「カフェ うつみーたん」

万丈「うつみーたん？」

一海「みーたん!?!?!?!?」

幻徳「内海？」

葛城「まあとにかく入ってみよう」

「チリンチリーン」

4人がカフェに入るとメイド服姿の美空とエプロンをした内海が出迎えた

美空「いらっしやいませー！」

内海「いらっしやいませ」

一海「みみみみーたん!!!」

美空「み、みーたん？」

一海「猿渡 一海 29歳独身、前世であなたを見た時から、ずっと心火を燃やしてフォーリンラブでした！あ、あの握手してもらってもいいですか？」

美空「え、まあいいですけど」

美空が手を出すと一海は少し…いやだ…いぶ震えながら手を出した

一海「ありがとうございます!!!」

「ぎゅ」

一海 (オワーーーーーオワーーーーー!!!オワーーーーー!!!
みーたんと握手してるーーーーー!!!心臓がドキドキバクバク!!!生
きててよかったーーーーー!!!)

万丈「うるせーよカズミン!全部声に出てるし美空引いてるし!」

美空「…………あのほうがいいですか?」

一海「あ、はいありがとうございます」

一方その隣では葛城と幻徳が内海と話していた

葛城「あなたは内海さんですか?」

内海「そうだがなぜ私の名前を?」

幻徳「まあいろいろあつて知っているんだ」

内海「そうですか、まあお疲れでしょうから一息入れたらどうです

?」

葛城「じゃあ内海さん」

内海「ここではマスターと呼んでください」

葛城「マ、マスターコーヒーを1つ」

幻徳「俺はキャラメルラテ砂糖多めで」

内海「かしこまりました(え、砂糖多め!?)」

一海「みーたん!パンケーキを1つおねがいます!」

万丈「俺カツラーメン」

美空「かしこまりました!」

美空が厨房に入つていった

一海「メイド服のみーたん…超可愛い!!!」

万丈「あー!うるせー!」

すると美空が厨房から戻つてきた

美空「お客様、カツラーメンは何味にしますか?」

万丈「じゃあ塩で」

美空「かしこまりました!3分お待ち下さ〜い」

3分後

美空「どうぞカップラーメン塩味で〜す」

美空はすぐに厨房へ戻った

万丈はなぜかカップラーメンの商品名を見た

「その塩、龍我ごとく!!?」

万丈「(なんか字が違う、確か『昇龍』だよな、まあいいか)いただきます」

美空「お待ちどうさまでした〜パンケーキです」

すると一海は両手を上げ、万歳をし始めた

一海「みーたんのパンケーキだあー!バンザーイ!バンザーイ!

万丈「早よ食え」

内海はコーヒーと砂糖多めのキャラメルラテを持ってきた

内海「どうぞ」

葛城「ありがとうございます内、マスター」

幻徳「おい内海」

内海「マスターです」

幻徳「砂糖多めと言っただろ」

内海「多めに入れましたが」

幻徳「砂糖多めといったら普通は角砂糖多めだろうがー!」

内海「(知らねーよ!!?) 申し訳ありません作り直してきます」

10分後

葛城「さあみんなそろそろ行こうか」

万丈「そうだな」

一海「えーまだここにいたい〜。な、みーたん?☆」

美空「……………」

幻徳「違うみたいだな」

一海「そんな訳ないよな!なあみーたん!!?」

万丈「いいから行くぞ!!?ほらこつちに来い!」

葛城「じゃあサイボーグ内海じゃなくて、マスターごちそうさまでした」

万丈が一海の耳を引っ張る

一海「いででで!やだ!まだ行きたくない!みーたん!!?」

みいーたあーん!!?」

4人はそのまま店から出た

するとカフエが突然消えた

万丈「あれ?カフエが消えた」

葛城「なんでだ?…もしかすると幻想だったのかも」

幻徳「幻想の割にはちゃんと飲んだり食べたりできたな」

一海「みーたん超可愛いかったし」

葛城「まあとにかく先へ行こう」

そして4人はどンドン進んで行き20層のボス部屋まできた

一海「ああみーたん」

一海が急に座り込む

万丈「いつまで落ち込んでんだよ」

一海「だって…だって」

万丈「ハア、あんまり落ち込んでると美空に嫌われるぞ」

すると一海が急に立ち上がった

一海「落ち込んでなんかいない、心火を燃やしてぶっ潰す」

葛城「やる気がでたみたいだね、よし行くよ!」

ボス部屋を開けるとそこには風神雷神図とアブソープがいた

アブソープ「よ!仮面ライダー諸君、20層到達おめでとう!そして俺からのプレゼントだ!」

アブソープが遺伝子を風神雷神図に憑依させた

すると風神雷神の目が赤く光り屏風から飛び出してきた

アブソープ「そんじや頑張れよ!Good Bye」

アブソープはまたもどこかへワープした

葛城「今度は風神雷神か、みんな行くよ!」

「「おう」」

「「おう」」

「Aye You Ready?」

「「「変身!」」」

「クローズマグマ!」

「グリス!ブウラア!」

「ローグ オオラア!」

「ゴリラゴリラ ヤベーイ！ ハンパネーイ！」

変身した4人は二手に分かれた

万丈「俺は雷ヤロウをやる！」

葛城「じゃあ僕も」

一海「そんなら俺たちは風神様か」

幻徳「手加減などしない」

雷神サイド

万丈「オラ！」

葛城「ハア！」

2人の連携攻撃でやや優勢だが雷神はちよいちよいかウンターをしている

風神サイド

一海「ウオリヤ！」

幻徳「フン！」

こちらもやや優勢気味であるが風神はあまり攻撃をしてこない

そしてこの様子を50層からアブソープが観ていた

アブソープ「やつぱり分けたらダメだったかなあ？なーんか動きが遅い、あそうだ！くつつければいいんだ！よおーし、よっと」

すると突然風神と雷神が真ん中に引き寄せられた

万丈「あ？なんだ？」

一海「おいおい急にどうした？」

そして引き寄せられた風神雷神は融合して新たな姿となった

万丈「合体しちゃったよ…」

葛城「これはまずいな」

合体した風神雷神は全身から強力な雷を発生させ放出した

「ウアアアア！」

「ウアアアア！」

4人は雷をモロに食い倒れ込んだ

万丈「ヤベー体がメツチャ痺れる」

一海「これ動けそうにないぞ」

幻徳「く、マズイくるぞ！」

倒れている4人に風の力で高速移動しながら突っ込んできた

万丈「グハア！」

葛城「万丈！」

一海「ウア！」

葛城「カズミン！」

幻徳「グオ！」

葛城「幻さん！…クソ！動け！」

そして葛城にも突進してくる

葛城「グハアアア！」

万丈「あ！動ける！ウオオオー！」

4人は動けるようになり再び攻撃を仕掛けた

葛城（とにかくヤツの雷をどうにかしなきゃ…あ！そうだ！）

葛城はボトルを外して振った

【ダイヤ】

【ダイヤ&ダイヤ】

葛城「ビルドアップ」

【ダイヤダイヤ ヤベーイ！ カテーイ！】

葛城「ダイヤモンドは電気を通さないからもう雷は効かない、みんな！今こそ新アイテムを使うんだ！」

万丈「よっしゃ！いくぜ！」

万丈はリミットクロースドラゴンにグレートドラゴンエボルボトルを差し込んでボタンを押した

【極限！】

ビルドドライバーに装填する

【リミットクロースドラゴン】

【Aye You Ready?】

【Wake up DRAGON! Get Over The Limit!
it!】

【Yeah!】

万丈は仮面ライダーリミットクロースに変身した

簡単に解説

見たい目

- ・ 基本的に見た目はエボルドラゴン
 - ・ 胸の地球儀みたいなやつが大きなドラゴンマークになっている
 - ・ さらにグレートクローズカラーのドラゴンの翼を羽織っている
- 特殊能力
- ・ 感情がヒートアップするとスペックが上昇する
- 使用武器
- ・ クローズマグマナツクル
 - ・ ツインブレイカー
 - ・ ビートクローザー
- 初期スペックはクローズマグマよりも高め

一海「よし俺も！」

一海はパワーロボトライザーを右腕に装着してマキシمامロボツトボトルを振った

【マキシمام】

【マキシمام&ロボット】

ボトルを装填してレバーを押した。

するとどこからきたのかわからないが突然あの某ロボットゲームに出てきそうなロボットが出てきた

一海「ボトルアップ」

そしてロボットは分裂してグリスのあらゆる部分に合体した

【鋼の万能兵器 マキシمامロボ イエー】

またも解説

見た目

・ 肩や腕脚部のあらゆる場所にまるで鎧のようなものが装着されている（肩パーツはハザード風）

特殊能力

・ レバーを押すと3分だけ後ろの穴から変形するロボットアームが出てくる。3分経つと次使えるまで3分かかる（つまりロボットアームの使用時間が3分経つまで出したりしまったりできる）さらに全体のスペックが少し上昇する

使用武器

- ・ ツインブレイカー

(その気になれば目からビームも出せる)

初期スペックはグリスよりも大幅アップ

幻徳「俺もだな」

幻徳もパワードボトライザーを右腕に装着してクラックボトルN E0を振って開けた

【ピキ、ピキピキピキ】

【パリーン!!?】

すると今度はワニが出てきて分裂してローグにくっついた。そしてパワードボトライザーに装填してレバーを押した

幻徳「ボトルアップ」

【パリーンと碎ける!クロコダールNEO!】

【イエー!イエー!イ!!?】

またもや解説

見た目

- ・ 両肩にはワニの顔が横を向いてくっついていて腕やスネのパーツにもワニが噛み付くように合体し、腰には紫をベースに金のヒビが入った腰マントをつけている

- ・ 全体的にいろんなところがドガっている
- ・ つま先はよりワニらしく、拳はよりゴツくなっている

特殊能力

- ・ レバーを押すと超強化状態になり腰マントがワニの尻尾に変形する。

- ・ 攻撃の1つ1つが通常のクラックアップフィニッシュと同じ威力になる(使用時間3分 これは一度使うと3分経つまで止めることはできない 再使用まで3分)

- ・ スペックがかなり上昇する(使用時間3分 再使用まで3分)

使用武器

- ・ 基本的に拳と脚

・ネビュラスチームガン
・スチームブレード
初期スペックはローグより大幅アップ

葛城は粒子のように細かくなったダイヤモンドで3人をコーティングした

葛城「さあこれでもう雷は効かない！一気にいこう！」
「「おう!!?」「」

次回に続く…

タワー攻略（5）　なんであなたが!?!?

Wake up DRAGON! Get Over The Limit!
t!

【Yeah!】

【鋼の万能兵器　マキシマムロボ　イエー】

【パリーンと碎ける!クロコダールNEO!】

【イエー!イエー!】

葛城が粒子のような大きさのダイヤモンドで3人をコーティングした

葛城「さあ一気に決めよう!」

新アイテムで進化した万丈、一海、幻徳はボスに突っ込んで行く

万丈「まずは俺からだあ!」

万丈がビートクローザーとツインブレイカーを装備してボスを攻撃する

万丈「オラオラオラオラ!!?」

万丈がボスを吹っ飛ばした

万丈「なんだこの力!負ける気がしねー!」

吹っ飛ばされたボスはすぐに立ち上がり強力な雷を発生させ、一気に放った

葛城「残念けどもう雷は効かないよ、ダイヤモンドは電気を通さないからね」

すると雷が効かないと分かったのか今度はゴツツイ腕で風の力で加速しながら殴ってきた

一海「まさかの物理攻撃かよ!」

万丈「ていうか速くね!?!?」

ボスに殴られあつという間に吹き飛ばされた、ただ一人を除いては

葛城「僕にはダイヤモンドの力があるから大丈夫(^^)」

葛城が全身をダイヤモンドの結晶で覆っていた

【ズルい!】

葛城「まあ防御出来てもこのままじゃ攻撃できないんだけどね」

幻徳「つまり攻撃は俺たちに任せるってわけか」

一海「いやほんとにズルいな」

万丈「おい！アイツなんか飛んでるぞ！」

万丈はボスが空を飛んでいることに気づいた

一海「あれじゃ攻撃当たんねーぞ」

葛城「大丈夫だよ一海、キミは空を飛べるからね」

一海「え、マジ？」

葛城「うんマジ」

するとボスがタワーに穴を開け、高速で出て行ってしまった

幻徳「タワーから出たぞ」

葛城「マズイ！アイツを倒さないと次の層に行けない！追いかけるな

きや！」

一海「俺は空を飛べるんだろ？俺が連れ戻してくる！」

そう言うで一海はパワーボトライザーのレバーを押した

レバーを押すと背中からロボットアームが2本出てきた

更にそのロボットアームが変形してジェットパックになった

一海「待てこらあ！」

一海はタワーの外に出て物凄いスピードでボスを追いかけた

葛城「僕たちはトドメを刺す準備をしよう」

一海はあつという間にボスを見つけた

一海「みーっ！つーっ！けーっ！たーっ！」

一海は圧倒的スピードでボスに近づいていった

一海「はい！つーかまーえたー！♪」

一海はボスの足を掴み、そのままタワーへ戻っていった

万丈「戻ってきたぞ！」

葛城「みんな準備はいい？」

幻徳「いつでもいけるぞ」

葛城「一海！そのまま投げてください！」

一海「任せろ！オオラア！」

一海はロボットアームでタワーにできた穴にボスを投げると葛城がダイヤの鎖でボスを拘束した

葛城「今だみんな！」

葛城が合図を送ると3人が一気に決めにかかる

【Ready Go!】

【リミット ドラゴニック フィニッシュ!】

一海と幻徳がボトライザーのレバーを長押ししてベルトのレバーを押した

【マックス パワード オン!】

【スクラップ フィニッシュ!】

【マックス パワード オン!】

【クラックアップ フィニッシュ!】

【「ハアアアアア!!!」】

ボスにトリプルライダーキックが決まった

そしてボスはダイヤの鎖とともに粉碎した

万丈「よっしゃあ！」

幻徳「先を急ぐぞ」

一海「ほら行くぞ龍我」

そしてこの後も新アイテムを使って次々攻略していく

葛城「やっと30層だね」

一海「さつさと突破するぞ」

4人はボス部屋へやってきた

扉を開けるとなんとそこには2人の最上 魁星がいた

最上 A「よくぞここまでできた、仮面ライダー諸君」

最上 B「だがお前たちはここで死ぬんだよお！」

葛城「なぜだ…なぜあなたがこんなところにいる!?? あなたはアブソブなんかと手を組むような人ではないはずだ！」

最上 A「その声、葛城くんか? 久しぶりじゃないか、元気にしてたか?」

葛城「僕はあなたを科学者として尊敬していた…なのになぜ!?!」

最上 A「私はエニグマを使って帝王の力を得ようとした…だが、アブソブによってエニグマは破壊されてしまった」

最上 B「だが俺は考えた! アブソブの力と私の科学力を融合さ

せれば帝王の力を得ることができないかど！」

最上 A「だから私はアブソープの下についた、そして遂に私は帝王の力を手に入れることができたのだ」

「見よ、これが帝王の力だ」

【ギアリモコン】

【ギアエンジン】

【ファンキーマッチ】

【バイカイザー】

【パーフェクト】

2人の最上は融合し、バイカイザーとなった

最上「今ここでお前たちを倒して、帝王の力でアブソープとともに星を吸収してやる！」

葛城「あなたは間違っている！科学はそんなことのためにあるんじゃない！科学は人に未来を、希望を与え、人を笑顔にするためにあるんだ!!？」

万丈「巧の言う通りだ！なにが帝王の力だ、そんなもの俺たちがぶっ壊してやる！」

最上「ほぎくなー!!？」

最上はエネルギー状の歯車を大量に投げってきた

葛城「ビルドアップ」

【ゴリラゴリラ ヤベーイ！ ハンパネーイ！】

葛城は両腕のゴリラアームで歯車を破壊した

最上「帝王の力を思い知れー！」

葛城「ハア！」

激しい攻撃戦が始まる

一海「俺たちもいくぞー！」

幻徳「おう」

幻徳は超強化状態になり連続攻撃をする

幻徳「ウオオオ！」

最上「クソ、帝王の力がおされてる…なんて力だ」

それもそのはず、幻徳の超強化状態は攻撃の一発一発がクラック

アップファイニッシュと同じ威力なのだから

更に一海がロボットアームで最上を掴み、万丈がクローズマガマナックルで殴る

【ボルケニック ナックル！】

【アチャー！】

万丈「オラア！」

最上「グハア」

更に一海がロボットアームとツインブレイカーでめっちゃ殴って、地面に叩きつける

一海「オラオラオラオラア！」

最上「グフォ」

葛城「一海、そのまま地面に押さえつけといて」

一海「わかった」

そして一海が最上をロボットアームで地面に押さえつける

葛城「これで最後です」

【Ready Go！】

葛城は最上の上に立ち、両腕のゴリラアームで最上にトドメを刺していく

最上「ま、待て！偉大なる私の帝王の力をこの世から消してはならない！」

最上が必死に命乞いをする。だが葛城はまるで聞こえていないかのように最上に向かってゴリラアームで

最上「待て！落ち着け、落ち着くんだ葛城くん！やめろおおお！！！！」

トドメを刺す

葛城「さよなら」

【ハザードファイニッシュ！ゴリラゴリラファイニッシュ！】

最上「ぎゃああああ！！！！」

最上は痛烈な悲鳴をあげ爆発した

すると次の層へ行く扉が開いた

一海「よかったのか？尊敬する人を倒して」

葛城「いいんだよ、今は世界を救うことが優先だからね」

一方その頃50層
アブソープ「完全体まであと40%：俺もそろそろ遊びに行くか
な」

次回に続く：

タワー攻略（6） 私は間違っ てないー!!

最上を倒した4人は着々と層を進んでいった

そして35層のボスを倒した時に何かドロップしたのに万丈が気づいた

「おいなんか落としたぞ」

「どれどれ龍我ちよつと見せてみる、おいこれパンドラパネルじゃねーか！しかも2枚！」

幻徳Tシャツ（何故に？）

「パンドラパネル？なんだいその興味深い名前は？」

すると幻徳が勝手に解説を始めた

「この世界の葛城は知らなくて当然だ、俺たちの世界にパンドラボックスという強大なエネルギーを秘めた箱がある、パンドラパネルはそのパンドラボックスの一部のことだ 引用ヒゲpedia」

「ヒゲ、それを言うなら Wikipedia な勝手に変なサイト作るな。ヒゲpediaなんてどうせロクな情報ないんだからよ」

「んだと？やるかポテト？」

「ああん？上等じゃねーか」

「また始まったよ」

「じゃあこれを使えば更に強いアイテムを作ることができるのか！く〜これは科学者の血が騒ぐな〜」

「あいつらはケンカしてるけど、とりあえず今は次の層へ行こうぜ」

「でもせっかくだから新アイテム作りたくないなあ」

「せっかくここまで登ってきたんだ新アイテムはアブソープを倒してからでいいだろ？」

「……………わかった、先へ進もう」

葛城は新アイテムを作るのを一旦諦めた

そして4人は40層へと進んだ

「さーてボス戦だな」

「よし、気合い入れていくぞー！」

一海はそう言うのとボス部屋の扉を開けた

するとなんとそこには内海がいた

「お待ちしておりました皆様」

「内海、なぜここに？」

「なぜ？って私はアブソーブ様に忠誠を誓ったからここにいますよ」

「お前はこつちの世界でもやることは変わらないみたいだな」

「なんの話かよく分かりませんが、あなた達にはここで消えてもらいます」

すると内海はアブソーブドライバーを装着した

【コウモリ】

【発動機】

【ナイスマッチ！】

内海は勢いよくレバーを回してニヤリと笑った

「変身！」

【バットエンジン　フハハハハハ】

【仮面ライダーマッドログ　見参！】

「まさかカフェのマスターがボスだなんてね、驚いたよ」

「みーたんじゃなくてよかったー」

「そこかよ！」

「とにかくやるぞ」

4人はベルトを装着した

【「変身！」】

【Wake up DRAGON! Get Over The Lim
it!】

【Yeah!】

【鋼の万能兵器　マキシマムロボ　イエー】

【パリーンと碎ける！クロコダイルNEO！】

【イエー！イエー！？】

【オーバーフロー】

【剛腕のワイルドデストロイヤー　ゴリラゴリラ】

【ヤベー！ハンパネー！】

「いくぞー！」

「かかってこい！」

内海は4対1にも関わらず一歩も譲らない攻撃戦をする

「なぜアブソープに忠誠を誓った」

「そんなことお前には関係ない！」

内海はベルトのレバーを回した

【Ready Go! デイストラクションアタック!】

内海は幻徳に強力なアッパーを決める

「消えろー！」

「グア」

幻徳が大きく吹き飛ばされる

「ヒゲ！」

「幻さん！」

「いくぞカズミン！」

「おう！」

万丈と二海が同時技を仕掛ける

【ヒッパレー！ ヒッパレー！ ミリオンヒット!】

【ツインブレイク!】

【オラア!】

万丈と二海の同時技が決まる

「グハア！」

「今度は僕だ！」

【ハザードファイニッシュ！ゴリラゴリラファイニッシュ!】

すると今度は葛城が右手にエネルギーをため、必殺技を放った

「ハアア！」

「おっと危ない」

内海はとっさにそれを避けて葛城に関節技をかけてベルトのレバーを回した

【Ready Go! デイストラクションアタック!】

内海は関節技を解き、背中に巨大な羽を広げ空を飛んだ

そして上空から強力なライダーキックを葛城に放った

「消えろー!」

「ウワァー!」

葛城は部屋の壁に吹き飛ばされた

「次はお前だー」

内海は一海に指を向けた

「俺か」

「お前も消えろー!」

内海が一海に向かって突進する

【Ready Go! デイストラクションアタック!】

一海は内海 of 突進を避けようとしたが速すぎて間に合わずくらくらってしまった

「グワァー!」

一海は内海に突進をくらしい壁に吹き飛ばされた

「カズミン!…このやろー!!」

万丈の感情が高ぶる

そして内海に強力な連続攻撃をする

「オラオラオラァー!」

「ほう、なかなかやりますね」

万丈はツインブレイカーにリミットクローズドラゴンを装填した

【レディゴー レッツブレイク!!】

「これでどうだー!」

万丈の技が内海に決まる

「グハー!」

内海は万丈の技をくらいその場にうずくまる

「これで最後だ!」

【Ready Go! リミットドラゴニックフィニッシュ!】

万丈は空高くジャンプし、ライダーキックを放った

「オラー!」

万丈の必殺技が決まった、と思った瞬間、内海がそれを避けた

「なに!?」

「あまいんだよ!」

「Ready Go! デイストラクシオンアタック!」

内海はネビュラスチームガン ライフルモードにエネルギーをため万丈に放った

「ウアー!」

万丈も壁に吹き飛ばされた

「フハハハハ! ハーハハハハ! 弱い! 弱過ぎる! これで終わりにしましょうかね!!」

内海が万丈にトドメを刺そうとしたそのとき、幻徳が立ち上がった

「げ…幻さん?」

「ハアハア…まだだ…内海…」

「ん? おやおやまだ生きていましたか、とつくに死んでいるのかと思っていましたよ」

「勝手に殺すな」

「まあいいです、すぐに消してやりますから」

「おいヒゲ、俺はまだやれるぞ」

「俺もだ」

「幻さん、僕もまだいける」

「すまないが、ここは俺一人でやらせてくれ」

「おい、何言ってるんだ!?!」

「…わかった」

「カズミンまで」

「龍我、葛城、俺たちは見守るだけだ、いいな?」

「でもよ」

「ヒゲにはヒゲなりの考えがあるんだろ、だから手出しはできねー」

「なるほど」

「そういうわけで内海、ここからは1対1だ」

「いいでしょう、結果は変わりませんけどね」

「勝負だ! 内海ー!!」

幻徳はスチームブレードを装備して内海にジャンプ斬りをした

「ハアー!」

「フーン!」

互いに激しい攻防戦を繰り広げる

「ハア！」

内海の強烈な蹴りを受け幻徳は吹っ飛ぶ

「ハアハア……お前は……自分のしていることが間違っているとわかって
いるか？」

「私が間違っている？なにをバカなことを言っているんだ」

「お前の科学の力があればアブソープからこの世界を救えたはずだ、
なのになぜお前は自分の科学の力でアブソープに対抗することをし
ない！」

「……………対抗したさ、対抗して対抗して対抗した!!でも、あの方
には私の科学の力は通じなかった！だからあの方に忠誠を誓った！
このまま死ぬなら忠誠を誓って、科学者として生きていった方がよっ
ぽどマシだ！」

「それはただお前が、科学で作る未来を諦めたただけだ！」

「なに!?？」

「俺たちが使っているライダーシステムはアブソープに対抗する力が
ある。使い方によっては多くの人々を苦しめてしまう、だが愛と平和
のために使えば救える世界、救える未来がある！そしてその未来を作
るのが科学者だ！」

「ならお前になにができる？お前にあの方を倒せるのか？」

「倒せるかどうかじゃない、この世界のため、愛と平和のために俺たち
はアブソープを倒す！」

「そうか、だとしても私は間違っていない!!」

「いや、お前が科学で作る未来を諦めた時点で、お前は間違っているん
だ！」

「なんだと？」

「諦めていなければ葛城のようにライダーシステムを作ることだって
できたはずだ。なのになぜお前は自分が世界の消滅を早めているこ
とに気づかない！」

「う、うるさい！うるさい！私はアブソープ様に忠誠を誓ったんだ！
なんであるうと、ここでお前たちを消す！」

「それがお前の答えか」

幻徳はボトライザーのレバーを押し、超強化状態になった

「これで決めてやる」

「全てはアブソープ様のために！」

幻徳と内海は再び激しい攻防戦を繰り広げる

「ウオオオオオ！」

「な、なんだこの力は、さっきと全然違う！」

「ハア！」

幻徳による強烈なパンチで内海が大きく吹き飛ばされた

「ク、クソ！まだだ！」

【Ready Go! デイストラクションアタック!】

内海はネビュラスチームガン ライフルモードにエネルギーをため、幻徳に放った

「ブン！」

が、しかし超強化状態となっている幻徳はそれを殴って弾き返した

「な、なんだと!?!」

「これで終わりだ内海」

【マックス パワード オン!】

【クラックアップ ファイニッシュ!】

「ウオオオ!!」

回転しながら両脚で噛み付くようなライダーキックを内海に決めた

「グアアアア！」

内海はその場に倒れ込み、強制変身解除した

「わ、私は間違っていたのか?」

「そうだ。だからこそ、今もっているその力をどう使うかよく考えろ」
すると2つのボトルがドロップした

それを葛城がすかさず回収する

「これはコウモリとエンジンのボトルだ」

すると次の層への扉が開いた

「さあて次の層へいきますか！」

万丈が扉に向かおうとしたその時アブソープ（マスター擬態）がワープしてきた

「仮面ライダー諸君久しぶりだな」

「アブソープ！」

「何しに来やがった」

「まあそろそろ俺も遊ぼうかなーって思ってたよ」

「なんだと？」

「そんじや早速」

そう言おうとアブソープドライバーを装着した

【ライノ】

【ライダーシステム】

【アブソープション】

【Are you Ready?】

【変身】

【ライノ ライノ ハードライノ】

【フツハツハツハツハツハツハ！】

【アブソープ フェーズ2 完了】

アブソープはサイのアブソープボトルを使ってフェーズ2 になった

—————

解説

見た目

・顔はエボルフェーズ1に酷似しているが目は灰色で額にサイの角が生えている

・肩には大きなサイの角のような鎧が付いている

・全身硬そうな装甲で覆われている

特殊能力

・特にない

スペック

・特殊能力が無い分フェーズ1より攻撃力と防御力が大幅に上昇している

・装甲が厚いためスピードは遅め

「さあ仮面ライダー諸君、かかってきな」

「みんな、ここでアブソープを倒そう！」

「「おうー」「」」

次回に続く…

すごいでしょ？・最高でしょ？・天才でしょ？

「ライノ」

「ライダーシステム」

「アブソープション」

「Are you Ready?」

「変身」

「ライノ ライノ ハードライノ」

「フツハツハツハツハツハツハ！」

「フェーズ2完了」

フェーズ2になったアブソープは挑発するように指をクイツとしてきた

「まだいけるか？幻さん」

「心配はいらない」

4人は一斉にアブソープへと向かっていく

「ハア！」

カン！

まるで鉄を金槌で叩いているような音がした

「!？」

「あまいんだよ」

葛城がゴリラアームで思いっきり殴ってもアブソープには全く効いていない、いやそれどころか硬すぎて手が痺れてしまうくらいだ

「ゴリラアームが効かないなんて…」

「所詮、お前はその程度だってことだ」

アブソープは葛城を持ち上げた

「葛城を離しやがれ！」

万丈や一海、幻徳が一斉に攻撃をするが、アブソープには全く効いていない

「邪魔だ」

アブソープは葛城を武器のように振り回して万丈、一海、幻徳を吹き飛ばした

「グアハ！」

当然振り回された葛城もダメージを負う

アブソープは葛城上へ投げた

「くたばっている」

そして落ちてきたところを強靱な腕で見事なリアクトをして吹っ飛ばした

「グアアア！」

「さあてここまででウォーミングアップは終わりだ、そろそろ本番だな」

するとアブソープは残像が見えるくらいの速さで万丈に近づいた

そして右手にエネルギーをためて、万丈の腹の真ん中に思いつきりパンチをした

万丈はあまりの速さに避けることが出来ず、そのまま壁まで吹っ飛ばされた

「カハッ！」

「お次はつと」

アブソープは肩パーツのサイの角を腕に装着した

そして今度は幻徳へまた残像が見えるくらいの速さで近づくと、超連続パンチをした

「フハハハハハハハハ！」

最後の一発とともに幻徳を万丈の方へ吹っ飛ばした

それと同時に3分経ったので幻徳の超強化状態が解除された

「最後はつと」

アブソープは一海へ高速で近づくと同時に蹴りをくらわせた

「グオー！」

一海が軽く吹っ飛んだ瞬間、アブソープは吹っ飛ぶ一海の後ろへ回り込み、サイの角で殴ってまたも万丈の方へ吹っ飛ばした

「ウワア！」

「おいおいお前らハザードレベル上げたのにこんなもんかよ、ガツカリだ……」

アブソープはその場を立ち去ろうとした、だが

「ま、待て…まだ終わってない！」

「ほらう？まだ生きていたか、しぶとい奴め」

「当たり前だ…」

【ダイヤ&ダイヤ】

【Are you Ready?】

「ビルドアップ」

【オーバーフロー】

【輝きのハードガーディアン ダイヤダイヤ】

【ヤベーイ！カテーイ！】

葛城がダイヤダイヤフォームにチェンジしてアブソープの方へ突進していく

「うおおおー！」

「面白い、かかってこい」

アブソープは自信満々なのか葛城の突進に対して無防備に構えていた

葛城はダイヤで巨大アームを作り、それを腕に装着してそのままアブソープを殴った

「ハア!!」

ゴン！

「そんなもんか？ダイヤつてのは」

「き、効いてないだど!?？」

「効かないと分かったところで、そろそろお別れの時間だ」

アブソープは葛城を軽く蹴って距離を取るとベルトのレバーを回した

【Ready?Go!】

「これで終わりだ」

「そうはいくか！」

【Ready?Go!】

【ハザードフィニッシュ！】

【ダイヤダイヤフィニッシュ！】

葛城は体の前に全エネルギーを使って巨大なダイヤの盾を作りだ

した

「そんな盾で防げると思うな！」

アブソープは両腕にサイの角を装着するとそのまま葛城に向かって突進した

「碎け散れ！」

【アブソープフィニッシュュ！】

【Good by】

「く、なんて威力だ…このままじゃ」

アブソープの突進は全エネルギーを使ったダイヤの盾にどンドンヒビを入れていきながら、葛城を倒れている3人の方へ押していく
「お仲間と共に吹き飛ばせ！」

アブソープが叫ぶと同時にダイヤの盾が破壊され、葛城は3人の方へ吹き飛ばされた

「グハア」

「お、おい…葛城大丈夫か？おい龍我、ヒゲ、生きてるか？」

「おう」

「なんとかな、超強化状態が解除していたら危なかったかもしれん」

「全員生きてるなんてお前らどんだけタフなんだ？まあこれで終わりだけだな」

アブソープは再びベルトのレバーを回した

【Ready?Go!】

【アブソープフィニッシュュ！】

【Good by】

アブソープは葛城、万丈、一海、幻徳に突進して壁を破壊してタワーから吹っ飛ばした

「「「ウワアアアア!!!」」」

「これでアイツらも諦めるだろう」

アブソープはそう言うときまたどこかへワープした

タワーから吹っ飛ばされた4人はゴミ処理場にある大きなゴミの山に落ちた

「痛！……！」

「クッサ!!!」

「と、とにかく家に戻ろう」

4人は酷い臭いのするゴミの山から抜け出して葛城の家に向かった

そして家に着いてすぐに怪我の手当てをした

「なんで病院に行かないんだ？カズミンや幻さん、葛城もすごい怪我なのに」

「最近タワーでの戦いが増えて、この辺の病院の人はみんな違う病院に避難しているんだ勿論患者さんもね。それに、もし入院なんてことになったらアブソープといつでも戦えるような準備ができないからね」

「そうか」

「さて、僕は手に入れたこのパネルを使って新アイテムを作るよ」

「じゃあそのあいだ俺たちはこの辺の警備でもしておく」

「ありがとう、多分3日ぐらいで完成すると思う」

同時刻アブソープタワーではアブソープと葛城 忍が話をしていた

「思ったより変わってなかったなあアイツら兄さんの世界も大したことないな」

「君のお兄さんと君とではどちらが強いんだ？」

「そーいやまだ本気のバトルをしてないな、でも完全体同士なら俺が勝つと思うな」

「そうか」

「先生もぼちぼち出番かもよ」

「そうだな、準備くらいはしておくか」

3日後葛城が少々テンション高めで部屋から出てきた

「遂に完成した！60本全てのボトルの成分が入ったボトル、その名もジーニアスボトルだ！」

「やっぱりこつちの世界でもジーニアスボトルを作ったのか」

「すごいでしょ？最高でしょ？天才でしょ？」

「お、おう」

「あともうひとつのパネルを使って新アイテムを作ってみたんだけど、ブランク状態のままなんだ。きつとなにかが足りないだろうけど、僕が出来ることは全てやったから後は万丈たち次第だよ」

「おうよ任せとけ」

「せっかく作ってくれたんだ絶対使えるようにしてやるぜ、なあヒゲ？」

「当たり前だ」

「それじゃあアブソープを倒しに行こう」

葛城たちはアブソープタワー40階まで来た

「確かここでアブソープに負けたんだよな」

「いや負けてない！」

「うるせーなヒゲ、Tシャツ破くぞ」

「な!?それはダメだ！」

「なら黙ってろ」

「それじゃあ行こうか」

葛城は41階への扉を開けた

「変身！」

：
：
：
：

そして4人は49階のボスを倒して50階への扉の前で来た

「いよいよだな葛城」

「ああこの時のために敢えてジーニアスポトルを使ってこなかったからね、早く使ってみたくてウズウズしてるよ」

「俺たちも早く使ってみたいから早く行こうぜ」

「ふん、新アイテムなどすぐに使いこなしてみせる」

「さあ行こう」

葛城は50階への扉を開けた

開けるとそこには大量のスマッシュとハードガーディアンがいた
そしてそれをあつという間に蹴散らした4人はボス部屋手前まで
きて足を止めた

「やあ仮面ライダー諸君、生きていたなんて驚いたねえ」

アブソープが急に4人の前にワープしてきた

「アブソープ！今度こそお前を！」

「まあそんな焦んなよ、俺はあの扉の奥で待ってるからよ」

アブソープはそう言うのと奥に見える明らかに今までとは違う大きな扉を指差した

「この扉の門番を倒せたらあの扉が開いて俺と戦える。まあ無理だろうけどな」

「んだと!?!?」

「せいぜい頑張れよ、Good by」

一海がアブソープに向かおうとした瞬間アブソープはワープした

「とにかく門番を倒して一刻も早くアブソープを倒そう」

「そうだな」

4人は扉のある方へ向かった。扉の前にまで来ると門番の姿が見えてきた、そしてその門番の姿を見て葛城は固まったように動かなくなかった

「な、何で…何でだよ…嘘だろ」

「久しぶりだな…巧」

「何故だ！何故なんだよ父さん！」

そう門番とは葛城の父、葛城 忍だったのだ

「さあ巧、私を倒してみせろ」

「…クツ」

「葛城、気持ちはわかるが今は世界を救うことに集中しろ」

「ああそうだね、ありがとう一海」

「父さん、僕たちは父さんを倒し、そしてアブソープを倒して世界を救うーいくよみんな」

「「おうー」」

葛城はジーニアスポトルを取り出した

「グレート、オールイエーイ！」
「ジーニアス！」
「イエーイ！ イエーイ！ イエーイ！ イエーイ！ イエーイ！ イエーイ！」
「イエーイ！」
「Are You Ready？」
「変身！」
「完全無欠のボトルヤロー！」
「ビルドジーニアス！」
「スゲイ！」
「モノスゲイ！」
「Wake up DRAGON! Get Over The Limit！」
「Yeah！」
「鋼の万能兵器 マキシマムロボ イエー」
「パリーンと砕ける！クロコダイルNEO！」
「イエー！イエーイ！」
「それが巧の答えか」
「ラビット」
「Tank」
「Are You Ready？」
「変身」
「鋼のムーンサルト！ラビットタンク！」
「イエーイ！」
「勝負だ！父さん！」

次回に続く…

科学が示す未来は希望か絶望か…

「さあかかってこい、巧」

忍はそう言うのとマッドローグ、バイカイザー、ヘルブロスを出現させた

「こいつらは私が作ったダミーだ、しかしダミーとはいえ本物より強いがな」

「ほう、わざわざ強さを教えてくれるなんて随分と親切なんだな。マッドローグは私に任せろ」

「じゃあ俺はヘルブロスだ、代表戦で負けたしな」

「じゃあ俺はバイカイザーだな」

「みんなありがとう。さあ行くぞ！」

「「おう！」」

万丈はヘルブロス、一海はバイカイザー、幻徳はマッドローグ、葛城は忍と交戦した

「ハア！」

「フン！やるな、巧」

「なんで父さんがアブソープなんかに興味するんだ！」

「私はこの世の科学に限界を感じた、だからこれ以上この世から戦争が絶えないのであれば、いつそ消えてしまった方がマシだと思った」

「そんなの、そんなの！ただ逃げてるだけじゃないか！ハア！」

「ク…、たしかにそうかもしれない。だが！もうこうするしか無いんだ！」

【ニンジャ】

【コミック】

【Are You Ready?】

【ビルドアップ】

【ニンニンコミック イエー！】

「科学の限界は誰にも超えることはできない！」

【分身の術】

分身した忍が剣で葛城を物凄い速さで斬りつける

「グア！…でもこの世界が消えてしまったら、最も何も無いだろ！父さん昔、僕に言ったよね。科学の作る未来は明るいって」

「…！」

（いいか巧、今もこの世界のどこかで戦争が起きている。父さんはな、そんな戦争を止める為に、ラブ&ピースの為に科学者になったんだ。科学の作る未来は明るい！よく覚えておくんだぞ。）

「科学に限界なんて無い！誰かがラブ&ピースを願っていれば！必ず明るい未来がやってくる！」

「私も最初はそう思った！だが現実はそう甘く無い！」

【火遁の術】

「グア！」

「どんなにラブ&ピースの為に研究を続けても、戦争は終わらない」

「父さん、父さんはずっと一人で研究してきたの？」

「ああそうだ」

「だからだよ、だから諦めてしまおうんだ！」

「一人でダメでも大勢なら乗り越えられる！それを僕は彼らに出会ってから身をもって感じた。」

そう言う葛城は戦っている3人の方を見た

「だから父さんも、もう一度頑張ってみないか？科学の作る明るい未来の為、ラブ&ピースの為に」

「…ああ…そうだな。だが今は私を倒すしか道は無いぞ」

「わかってるよ、本当は倒したく無い、けど世界の為だ！」

「父さんが出来なくても、僕が明るい未来にしてみせる！」

すると忍は剣を地面に置いて何かを受け止めるかのように両腕を広げた

「なら楽しみにしていよう。科学が示すのはラブ&ピースの希望か世界が消える絶望か」

「さあ私を倒せ！」

「…すまない父さん」

葛城はフルボトルバスターを取り出した

【ラビット】

「タンク」

「ジャストマッチ デース！」

「ハア！」

「ジャストマッチブレイク！」

「それで…いい…頑張れよ…巧」

最期の言葉を残すと、忍はそのまま息を引き取った

「父さん？おい！父さん！」

葛城の呼ぶ声はすでに忍には聞こえていない。そして葛城は忍の死を察した

「父さあああん！」

葛城が叫ぶと忍の身体が粒子となって消滅した

するとダミーが次々と消えていった

「あれ？消えた。どうなってんだよカズミン」

「知るかバカ」

「葛城、そっちはどうなっ…、」

幻徳は状況を察して葛城に声をかけるのを途中で止めた

「あ、みんな…こっちは…大丈夫、」

葛城は現実を受け止めきれないかのような口調でそう言った

「葛城、親父さんが目の前で死ぬ辛さは、俺にも分かる。だからこそ今のお前はアブソープを倒さなければならぬ、親父さんが望んだ世界にする為に」

「……………ありがとう幻さん、そうだね、父さんの為にもアブソープを倒そう！」

「よし！じゃあ気合い入れて行くぞ！」

「頼もしいねカズミンは」

「カズミンはって俺は？」

「万丈も頼りにしてるさ、今更だけど」

「行くぞ」

幻徳が大きな扉を開ける

（行って来るよ父さん。僕が必ず明るい未来にしてみせる）

扉を開けるとそこにはアブソープ（人間体）が待ち構えていた

「やあやあ仮面ライダー諸君。遂にここまで来たか。さあ!!ショータイムだ!!」

するとアブソープは後ろを指差した

「これはお前たちが今まで倒してきたボスから出たエネルギーを集めて復活したアイテム、アブソープトリガーだ。これを使えば俺は完全体になれる!」

アブソープはベルトにトリガーをさした

「完全体に必要なのもう一つ」

すると今度は見たことのないボトルを取り出した

「このダイナソロボトルだ。俺はこの星に来た時にこの星から最強の生物の記憶を抜き取りボトルにしたのさ」

そしてアブソープはベルトにボトルをさす

【ダイナソー】

【ライダーシステム】

【アルティメイション】

【Are You Ready?】

【変身】

【スパイダー! ライノ! ダイナソー! アルティメイション!】

【フハハハハハハ!】

【フェーズ3完了】

次回に続く…

ライダーたちはなぜ戦うのか

「フェーズ3完了」

アブソープが遂に完全体になった

「さて完全体になったことだし、まずは肩慣らしだな」

「完全体だろうがなんだろうが関係ねー!」

「どんなに強かろうと心火を燃やしてぶっ潰すだけだ!」

「行くよみんな!」

「二「ウオオオー!」三」

葛城たち4人はアブソープに向かって走って行く

万丈はクローズマグマナツクルで殴りかかる

「ハア!」

「甘い」

アブソープは目にも止まらぬ速さで万丈の攻撃をかわし続ける。

そしてアブソープの手が万丈の腹部に当たったかと思うと、手から強力なエネルギー弾が発射された

「グアア!」

エネルギー弾が腹部に直撃した万丈は大きく吹き飛ばされた

「龍我!...このやる!」

一海がパワーロボトライザーのレバーを押して背面からロボットアームを出現させ、そのままロボットアームをジェットパックに変形させた

「流石に空は飛べねーだろ!」

【シングル】

【シングル フィニッシュ!】

「これでもくらえ!」

一海は空からシングルフィニッシュをまるで雨のごとく放つが、アブソープはそれを擦りもせず避ける

「この程度なら雨の方がよっぽど当たるんだよ!」

アブソープは一海の真上にワープすると同時に一海を地面に叩き落した

「これでも食らってくだばってろ」

アブソープは両腕を合わせて手から波動砲を放った

「ウワアアア！」

一海はその場に倒れ込んだ

「さてお次は…お前だ」

アブソープの指が指す方向には幻徳がいた

「今度は俺か」

幻徳はパワードボトライザーのレバーを押して超強化状態になっ
た

「行くぞ！アブソープ！」

幻徳はアブソープに怒涛の連続攻撃をする

「オオオオオー！！」

だがアブソープは全くビクともしない

「なんだそんなものか、弱すぎて猫パンチでもしてるのかと思ったぞ」

「なに!？」

「パンチってのはな、こうするんだよ！」

「幻さん危ない！」

葛城がとっさに幻徳の前に出てジーニアスの力で作り出したダイ
ヤの盾でアブソープのパンチを受ける

「く…うわ！」

が、しかしすぐにダイヤの盾が破壊されてそのまま葛城は吹き飛ば
された

「葛城！」

「よそ見してる場合か！」

「!!」

幻徳が葛城からアブソープに視線を戻した瞬間アブソープの蹴り
が幻徳を吹き飛ばす

「…ク」

「あーあ、つまらん！」

アブソープはそう言うのと50階の天井突き破り、アブソープタワー
の屋上に出た

葛城たち4人は後を追うようにそれぞれ屋上に出た

「おやおや随分と諦めが悪いな」

「あいにく君を倒すまで倒れるわけにはいかないからね」

するとアブソープが何かを思い出したように話し始めた

「そういえば前に兄さんが言ってたな、そこにいる3人は過去に大切な人を失っている」と

アブソープがそういった瞬間、万丈と一海と幻徳の顔色が変わった
「1人は人体実験によってスマッシュにされて挙げ句の果てにはハザードレベルが足りずに消滅し、三羽ガラスとか言う連中は戦争に敗北して消え、父親は息子をかばって兄さんによって殺されたw実に哀れだなあ！フハハハハハ！」

「言いたいことはそれだけか」

万丈がポツリと呟いた

「ああん？」

「言いたいことはそれだけかって言ってるんだよ！」

「確かに俺は結局かすみを助けられなかった！」

「俺は目の前に居ながら、イツらを助けられなかった」

「最後まで親父に迷惑をかけてばっかりだった」

「ほらそうじゃねーか！結局お前らは誰も救うことはできない！大切な人も！世界も！」

「うるせえ！でもかすみは俺と一緒にいて幸せだと言ってくれた」

「最後までイツらは俺と一緒にいると言ってくれた」

「最後までこの俺を信じてくれて、国の未来を託してくれた」

「守れもしないのに戦う意味ねーだろw」

「戦う意味はあるよアブソープ、ラブ&ピースの為に！」

「大切な人を守る為に！」

「大事な仲間を二度と目の前で無くさない為に！」

「俺を信じて託してくれた国の未来を守る為に！」

「俺たちは！」

「僕達は！」

「」「戦う！」「」

すると万丈が持っていたブランク状態だったボトルが光った
「な、なんだこれ、どうなってんだ」

そして光がおさまると、万丈の手にはジーニアスボトルに酷似した
ボトルが握られていた

「遂に完成したんだ！もう一つの新しいアイテムが！」

葛城が少し興奮気味に新しいアイテムを見る

「よし龍我、早速使ってみるか」

「おう！」

万丈がボトルのボタンを押す

【ハイパー！ MAXイエー！】

万丈がベルトにボトルをさして、レバーを回す

【サーガ！】

【イエー！ ブラア！ オラア！ イエー！ ブラア！ オラア！】

すると万丈の横にいた一海と幻徳にもパイプが伸びてくる

「おい龍我！なんかパイプがこっちまで来てただけど！」

「どうなってるんだ」

「まあ気にすんな！」

【Are You Ready?】

「おい！待て！」

「変身！」

【三位一体 激闘ヤロー！ ライダーサーガアアア！】

【スゲーイ！マジパネーイ！】

「ん？おい！カズミンと幻さんどこ行った!?!」

「ここだバカ！」

「え!?!」

「お前の隣だよ！」

「は!?!何言ってるんだよ！」

「全く理解できん。一体どう言う状況だ？おい葛城、俺たちに分かり
やすいように説明してくれ」

「えーと、これはつまりそのー、簡単に言うるとー、万丈とカズミンと幻
さんが合体したんだ」

「……………ハアアアアア!?!」

Tシャツ（何故に?）

「まあ名乗るなら、『仮面ライダーサーガ』ってところじゃないかな?」

次回に続く…

親子の絆 Be The One

【三位一体 激闘ヤロー！ ライダーサーガアアア！】

【スゲーイ！ マジパネーイ！】

「えーつと、なんか合体しちまったけど…」

「にしても気持ち悪いいなこれ。おいヒゲ！足踏むんじゃねーよ！」

「うるせえな、狭いから仕方ねーだろ…クソポテト」

「んだと!?？ヒゲ！」

「なんだやるか？」

ギャアギャアギャア

「おいカズミン！幻さん！狭いから暴れんなって！」

三位一体の姿になった為、2人がケンカすると万丈も引つ張られるので、側から見れば1人が暴れているように見える

「まったく、君達は何をしてるんだ…」

その光景を見ていた葛城がため息をつく

「おいお前ら！俺を無視して遊んでんじゃねー！」

アブソープが万丈たちの背後へ回り込んで回し蹴りをした

が、万丈たちはそれを右腕だけで止めた

「な、なんだと!?？」

「別に遊んじやいねーよ」

そしてそのまま振り返って強烈な左ストレートをアブソープに与えた

「グハア！」

「おお！なんだこの力！今の俺は、負ける気がしねえ！」

「俺たちな！」

すかさず一海がツツコム

「クソがあ！」

「僕を忘れてもらっては困るよ！」

【ジーニアス アターツク！】

ジーニアスの必殺技を受けたアブソープが大きく吹っ飛ば

「グア…葛城い」

「さあみんな、最後の戦いだ」

「おう」

「こんなところで終われるかあ!」

【Ready Go! スパイダー アターック! Good bye】

「俺たちも負けるわけにはいかねえんだよ!」

万丈がベルトのレバーを1回まわす

【クローズ サイド!】

【Ready Go! ドラゴニック フィニッシュ!】

「うおらあ!」

アブソープと万丈の必殺技がぶつかり合う

「クソ、やつぱ強えな」

「まだまだだあライダーどもお!」

【Ready Go! ライノ ブレイク! Good bye】

「今度は俺だ!覚悟決めろやゴラア!!?」

一海がベルトのレバーを2回まわす

【 그리스 サイド!】

【Ready Go! スクラップ フィニッシュ!】

「ハア!」

一海の必殺技がアブソープに大ダメージを与える

「グアア…ハアハア」

ダメージを受けアブソープが膝をついていると、すかさず葛城が必殺技を放つ

【Ready Go! ジーニアス ブレイク!】

「ハー!」

「グア…葛城い!」

アブソープは、叫ぶと同時に葛城を掴んで渾身の力で葛城のベルトを殴った

「グアアア!」

「葛城!…くそ!」

幻徳がベルトのレバーを3回まわす

「ローグ サイド！」

「Ready Go! クラックアップ フィニッシュ！」

「オオラア！」

幻徳の必殺技がアブソープを吹っ飛ばす

「おい葛城、大丈夫か!?!」

万丈たちが葛城に走り寄ると葛城は変身解除していた。そしてジーニアスポトルが不完全な状態になっていた

「まずいな、変身解除される程のダメージじゃなかった筈なのに、ジーニアスポトルからラビットとタンクの成分が抜けて、ジーニアスフォームを維持できなくなったみたいだ」

「マジかよ！ヤベーじゃんか！」

「落ち着け龍我、とにかく葛城は離れてろ、ジーニアスじゃなきゃ今のアブソープと戦えないからな」

「ポテトと同意見だ、アブソープは俺たちで倒す」

「そうだね、万丈、一海、幻さん、任せたよ」

「二おう！任せとけ！」

「お話は終わったかな？ライダー諸君」

「おうよ、さあて第2ラウンドだ！」

アブソープと万丈たちは葛城から離れたところで激しい戦いを繰り広げている。万丈たちはアブソープと互角以上に渡り合っていた
「みんなはアブソープを倒す為に知らない世界からやって来た、そして見ず知らずの僕を助けてくれた、なのに僕は、みんなの為に何もできいていない。僕はなにもできないのか…！」

葛城が諦めかけたその時、葛城 忍が死んだ場所から2本のポトルが光りながら現れた。そしてそのポトルは葛城の元へ飛んでいった
ポトルが光ながら葛城の目の前で止まった。葛城はその光るポトルを眺めていた

「このポトルはなんだ…」

光るポトルの正体は葛城 忍が使っていたラビットとタンクのポトルだった

するとそのポトルの光がある人の幻像を映し出す

(巧、諦めるな)

「…！父さん！」

(ラブ&ピースの為に戦うお前を、父さんはずっと見守っているぞ)
「ありがとう、父さん」

(そしてこのボトルを巧と父さんとの絆の証として授ける。…いいか
巧、お前はヒーローになれ、巧がなりたいたいと思うヒーローに…)

そして忍の幻像は消え、ボトルが地面に落ちる

葛城がボトルを拾いながら立ち上がった

「わかったよ父さん、僕は、僕のなりたいヒーローになるよ」

葛城が立ち上がった瞬間、忍のラビットと坦克のボトルの成分が
ジーニアスボトルに入った

「ジーニアスボトルが復活した。父さん、一緒に戦ってくれ」

「グレート オールイェーイ！」

「ジーニアス！」

「Are you ready？」

「変身！」

【完全無欠のボトルヤロー！ ビルドジーニアス！】

【スゲーイ！ モノスゲーイ！】

「世界を守る、正義のヒーローの復活だ！」

葛城はもう一度ジーニアスフォームに変身できた

「お！葛城がジーニアスに変身したぞ！」

一海が葛城が変身したことに気づいた

「邪魔だ！どけ！」

万丈がアブソープを吹っ飛ばす

そして万丈たちが葛城に寄って来た

「葛城、戻ったのか？」

「うん、もう大丈夫だよ、ありがとう幻さん。それに万丈とカズミン
も」

「これで全員揃ったな、さあ！最後の祭りだああ！！」

「フハハハ！さあ来い！仮面ライダー！！最終ラウンドだ！」

次回に続く…